解説

特集「感性工学」にあたって

椎塚 久雄*

感性工学が本格的に注目されてからまだ日は浅いが、人の感性に関わる研究に興味を持つ人々の数は着実に増えていることは確かである。あいまいでとらえどころのない感性という概念をどのように扱ったらよいのか、という問いに対する答えを得ることは簡単ではないが、いろいろな意味で新しいテーマ発掘の可能性を秘めかつ魅力的なテーマに遭遇するチャンスも横たわっているのではなかと多くの人々が考えているのも事実であろう。

現在、感性を統一的に扱う方法論があるわけではなく、いろいろな方面からのアプローチが試みられているのが実状である。つまり、統一した枠組みの中での議論ではなく、それぞれの立場に立った問題解決を行っており、これは感性工学には普遍性のある方法論が確立していないことに起因しているからである。もちろん、個々の成功事例を積み上げることも大事なことであるが、我々は意識して感性工学のフレームワーク、すなわち「感性システム」を構築し、トータルとしての感性の研究の指針を与える時期に来ている。

本特集号での解説記事は5編で構成されている。まず、最初に筆者が「感性システムのフレームワーク」と題して、感性をシステムとしてとらえるための基本的な枠組みを提案している。詳細は本編を参照いただくとして、筆者が提案する感性システムのフレームワークでは、二次元平面の縦軸に「自然感性－人工感性」、横軸に「計測－表現」をそれぞれとって、第Ⅰ象限から第Ⅳ象限までの領域を定義している。本特集号の他の4編の解説は、この四つの象限に対応する代表的な最近の話題について述べている。

まず、第Ⅰ象限は「感性表現論」の領域であり、この世界に位置する内容は、広い意味でのデザインが最も妥当な分野となろう。

そのような意味で、原田昭氏には「デザインにおけ

る感性情報の取り込み」と題して解説をお願いした。感性をデザインの視点からとらえることにより、感性の新しい側面が明らかにされている。

感性システムの第Ⅱ象限は、「感性表現論」の領域であるが、これは未開の分野と言ってもよい。そこで、今村佳世、西山高史の両氏には「ヒューマノイド・エージェント」について解説をお願いした。これは言葉を変えれば、「ソフトウェアロボット」ということができる。つまり、「ネットワーク上で生息し、人間の姿・ふるまいを持つ知的なエージェント」をヒューマノイド・エージェントと定義している。これは、人工感性の最も重要な課題を扱っており、今後の発展が期待されている。

感性システムの第Ⅲ象限は、いわゆる「認知科学」の領域であり、具体的には認知システムの解析や設計が主となるであろう。この領域では、計測が重要な役割を果たしている。そこで、高寺政行氏には「感性製品のための物理計測と心理計測」について解説をお願いした。感性は、人と人あるいは人と物との情報のやりとりの中に存在し、さらの感性工学は社会の文化を豊かにすることができるとして発展途上にある。そのような意味から、この解説では感性製品としての衣服の対話型生産ネットワークのひとつのハブを構成する素材データベースに必要な素材特性とその測定方法、心理評価との関係について述べている。

感性システムの第Ⅳ象限は、モデリングの分野である。この領域では、感性工学の初期の段階から使われていた多変量解析、最近ではソフトコンピューティングの手法を用いていろいろな事例的研究が行われている。その中で、特に注目すべきものは「ラフ集合」による感性ルールの抽出である。そこで、原田利宣、井上勝雄、高橋靖、森典彦の四氏には「ラフ集合と感性」について解説をお願いした。これの意図するところは、その副題にもあるように、「ラフ集合の実際的な応用」にある。ラフ集合の啓蒙活動は当面の重要な課題であろう。

[問い合わせ先]

〒163-8677 東京都新宿区西新宿2-24-2

*工学院大学工学部情報工学科
〒163-8677 東京都新宿区西新宿1-24-2
Hisao Shiizuka
Department of Computer Science and Communication Engineering
Kogakuin University
Nishishinjuku 1-24-2, Shinjuku-ku, Tokyo 163-8677, Japan

工学院大学工学部情報工学科

椎塚 久雄

TEL : 03-3340-2971

FAX : 03-3348-3486

E-mail : shiizuka@cc.kogakuin.ac.jp